

ICT活用によるピアノレッスンが抱える課題の解決

Solving the Problems of Piano Lessons by Using ICT

小澤 俊太郎
(こども学科 助教)

要旨

本研究の目的は、保育者養成校であるS短期大学の抱えるピアノ個人レッスンの課題を解決することである。その課題として「レッスンの効率化」、「独習の支援」の二つを挙げ、ICT活用によってそれらを解決できるのかという問いに対し、平成30年度前期の授業で取り組んだ実践内容を述べる。二つの課題はトレードオフの関係になっており、ICT活用以前は同時に解決することが困難であった。しかし、今回の実践と、学生を対象としたICT活用に関する質問紙調査により、ICT活用が課題解決に有効であることが明らかとなった。

【キーワード：ICT ピアノレッスン 音楽教育】

I. はじめに

S短期大学の学生は保育士・幼稚園教諭を目指している。2年間という限られた時間の中で、保育者として必要な技術を学び、感性を養っていく。その中でも特に音楽は入学と同時に、ピアノの技術や感性に大きな個人差が出てくる分野である。小さい頃からピアノを習っていた学生、全くの初心者など経験の差が大きくなっていく分野であるからだ。その中で保育者として必要最低限のピアノ技術と豊かな感性を育むことが求められる。

ピアノに関しては、入学と同時に苦手意識を感じてしまう学生も多く、2年間という限られた時間内で指導していくことは非常に難しい問題である。

2年間といっても、S短期大学の音楽の授業は1年生の前期・後期、2年生の前期・後期とに分けられ、1年生は必修科目、2年生からは選択科目となっている。つまり2年生になって音楽を選択しない学生もいる。そのため、1年生のうちにバイエルを修了すること、こどものうたのレパートリーを増やしていくことが求められる。

S短期大学は、A・B・C・Dの4クラスに分ける、クラス制で授業が行われており、1クラスを30名程度で構成している。

音楽の授業は、毎回1クラスを45分の合同レッスン、45分の個人レッスンに分けて行われている。これにより、前半グループ（前半ピアノ個人レッスン・後半合同レッスン）と、後半グループ（前半合同レッスン・後半ピアノ個人レッスン）ができる。合同レッスンは全学生が共通して学ぶべき音楽の

基礎知識などを講義スタイルで行い、ピアノ個人レッスンは一人ひとりの学生のレベルに沿ったピアノの個別指導を行なっている。

ピアノ個人レッスンを担当する教員は、筆者の他に非常勤講師が4名おり、全5名の教員でレッスンを行なっている。

筆者がピアノ個人レッスンを担当する学生数は以下の表の通りである。

表1 ピアノレッスン担当学生人数（1年次生）

	前半グループ	後半グループ
A組	3名	4名
B組	3名	4名
C組	3名	4名
D組	3名	4名

表2 ピアノレッスン担当学生人数（2年次生）

	前半グループ	後半グループ
A組	3名	3名
B組	3名	3名
C組	3名	3名
D組	3名	4名

筆者は、ピアノ個人レッスンを担当しており、本稿はピアノ個人レッスンでの取り組みについて、第II節でピアノ個人レッスンの抱える二つの課題を挙げる。

第III節は、これまでの取り組みと、二つの課題解

決に向けた、ICT導入と実践について述べる。最後に第IV節でICTの導入と実践での課題解決に対する結果と考察についてまとめる。

II. ピアノ個人レッスンの課題

保育者養成校の学生はピアノ技術を専門的に学ぶわけではない。学生に求められているのは、保育現場で最低限必要なピアノ演奏技術や、子どもと音楽活動を行うための技術である。学生にとって音楽を学ぶということは保育技術の一つであり、そのために多くのレッスン時間をかけることはできない。

最低限のピアノ演奏技術といっても、やはり習得には時間がかかる。特に高校卒業後にピアノを習い始めた学生にとっては、未知なる分野であり、保育現場で音楽活動できるようになるためには多くの時間を要する。

S短期大学のピアノ個人レッスンは一人ひとりに指導を行っており、これは非常に恵まれている環境である。より、効果的にピアノ個人レッスンを進めるために、レッスンを効率よく行うことと、学生が授業外で独習できる環境作りが必要である。

II-1. レッソンの効率化という課題

先に述べたとおり、45分で3名または4名の学生を指導しているため、学生一人当たりのレッスン時間はおよそ10～15分となる。このレッスン時間内で、保育者を狙っている学生に伝えるべき事項を全て伝えるためには、効率の良いレッスンを行うことが必要である。堀田（2014）は「より効率的に時間配分を考えた指導法の改善、指導体制の確立が学校現場に求められている」¹⁾と述べ、効率的な指導法の必要性について言及している。特に保育者養成校で学ぶ学生は全員がピアノ経験者ということではなく、初心者の学生も多くいるため、レッスン内で音符の読み方、指使い、リズム、弾き歌いについてなど、実に多くの内容を教示する必要がある。ピアノ個人レッスンでの無駄な時間を極力減らし、レッスン内でやるべきことを明確化していくことが課題である。

II-2 授業外における独習の支援

レッスンの効率化という課題と同様に重要であるのが、授業外学習の支援についてだ。ピアノ個人レッスンにおける授業外学習とはピアノの練習

であり、いかに学生が独習することができるかが重要である。松原・遠山・斎藤（2006）は「初心者には、間違えた箇所を認識することができても、なぜ間違えたのか、今後どのように練習してよいか、といった練習方針を自分自身で判断するのは困難であり、初心者はなかなか技術の上達を見込めないという問題点があった」²⁾とし、初心者の独習の困難さの要因として、練習方針をピアノ学習者が見いだすことができない点をあげている。松原・遠山・斎藤はピアノ独習者に対する課題として述べているが、授業外における学習は独習として捉えることができる。授業外で取り組む課題を明確にすることが独習の支援として求められるのである。

独習の習慣がない学生はどうしても1週間の進み具合が遅くなってしまふ。そうすると、レッスンでは前週と同じような内容になってしまうケースや、家で事前にやっておくべきこと（譜読みなど）をレッスンでしなければならない事態となる。学生がレッスン以外の時間でピアノに向かうことが大切であり、取り組むべき具体的な課題を学生に伝えることが求められる。

ここまで述べてきたように個人レッスンの限られた時間の中で、いかに効率よくレッスンが行えるか、そして独習時に学生の関心を引き出せるのかが重要であると考えられる。それらをどのように改善していくのか、2つの課題に対してどのような取り組みが有効であるのかを考えた。そこで筆者はこれまで授業中に紙に記入していたレッスン課題を、授業外の時間を用いてiPadで記入し、その内容を学生にデータで送ることで改善されるのではないかと考え、授業に取り入れた。この取り組みによるピアノレッスンの効率化と、独習支援の効果について論じる。

III. 課題解決に向けたICTの導入と実践

まず、ICTについて簡単にまとめる。

ICT (Information and Communication Technology) は、「情報コミュニケーション技術」と訳され、「人と人」「人とモノ」の情報や知識の伝達・共有を意味している。

教育の分野でも各教科で盛んにICTが導入されているが、堀田（2014）は「音楽科は最もICT活用が進んでいない教科であるように思われる」³⁾と提言している。この原因として音楽科教員がICTへの

ネガティブなイメージを抱いていることを理由としてあげ、音楽教育の現場における実践の不足が課題としてあげられている。

本実践では、第Ⅱ節で提言したピアノ個人レッスンにおける二つの課題をICT活用で解決ができるのかを試みた。

筆者は、手書きでの使用が可能なiPad Proと手書きを行うために必要であるApple Pencilを用意した。アプリケーションはノートアプリ「GoodNotes」と、コミュニケーションアプリ「LINE」を用いた。

「レッスンの効率化」と「独習の支援」という二つの課題は、以前より筆者が取り組んできた課題であった。しかし、この二つの課題はトレードオフの関係になっており、課題解決は困難であった。

具体的には学生が独習できるよう次週の課題を授業内に手書きで明確に提示すると、そのためにレッスン時間が割かれてしまうという状況である。一方で、口頭で伝えただけでは課題の忘れや、練習で何を取り組めば良いのかわからず、次週のレッスンで譜読みなど授業前に取り組むべきものに時間を割いてしまう。

「レッスンの効率化」と「独習の支援」は分けて考えるのではなく、同時に解決することが重要である。

Ⅲ-1 ICT導入以前の2つの課題へのアプローチ

レッスンの効率化を測るために必要なのは、学生の現状と、レッスン課題を教員が把握することであり、練習の支援で大切なのは次週の課題を明確化し、

学生にきちんと提示することである。

レッスンの効率化のためICT活用以前より学生一人ひとりの個人レッスンカード(図1)を作成し管理してきた。

一番上の項目にレッスンで取り組んだ曲と、完成度・改善度、指導内容を記し、その下の項目には来週の課題を記した。これにより各学生の現状を理解することができた。

しかし、毎週1、2年次生合計52名の学生レッスンのため、毎週52枚の紙が増えることになり、膨大な量になってしまった。さらにファイルに閉じて管理していたが、授業が進むにつれ過去の用紙が下にいってしまい、一覧性に欠けていた。

さらに、独習の支援のために、レッスンの最後にレッスンカードに記入したものをまとめて、出席カード(図2)にも次週に向けて改善すべきポイントを書いて渡していた。その結果、学生は取り組むべき課題を忘れずに取り組むようになった。また、次の課題がわからなかったという理由で取り組むことのできなかった学生はいなくなった。しかし、授業者の記録用と学生のレッスンカード用にほぼ同じ内容を二回記入する。時間にしてみれば数分で終わる作業ではあるが、やはり10～15分という限られた時間の中では非常に勿体無い時間であると感じていた。以前、自分の記録のみを取り、レッスンカードを宿題として学生に書かせるということを実践した時期もあったが、違った内容をやって来た学生や、課題が良くわからなかったということで練習をしてこない学生もいたためやめた。

(図1 個人レッスンカード)

個人レッスンカード

名前 _____

_____ 月 _____ 日 _____ 曜日

～レッスン～

曲名	完成度	改善点	内容

～課題～

項目	改善点

～課題～

(図2 出席カード)

音楽Ⅳ 出席カード 学級番号 _____ 氏名 _____

日	合唱レッスン			個人レッスン		
	月/日	出席	欠席	月/日	出席	欠席
1				1		
2				2		
3				3		
4				4		
5				5		
6				6		
7				7		
8				8		
9				9		
10				10		
11				11		
12				12		
13				13		
14				14		
15				15		

試験曲

「GoodNotes」に読み込み、その学生に合った指使いを記入した。楽譜はデータ化されているため、その上から記入した内容は自由に書き換えが可能のため、一人ひとりにあった内容を教示することが可能になった。これも同様に、書き出しを行い学生に「LINE」で送ることで、レッスン時間に割く時間が減った。課題として学生はそれを自分の楽譜に書き写すことで、ICTの目指すところでもある主体的な学びへとつながる。

今回の実践はS短期大学1年次・2年次の学生のうち、筆者がピアノ個人レッスンを担当している学生52名（1年次生27名、2年次生25名）を対象に実践をした。

実践に先駆けて学生に「スマートフォンを使用しているか」また、「LINEを使用しているか」、「レッスンの課題をLINEで送信して良いか」を確認した。そうしたところ、全52名の学生がLINEを使用しており、課題をスマートフォンに送っても良いという回答であった。

IV. 結果と考察

今回の実践で、これまでレッスン室だけでしかできなかった課題の提示等が、レッスン室という場所に関係なくできるようになった。

また、これまでではレッスン内容と課題を教員と学生用に2つ記入していたものが1つになったことで、レッスンの効率化に繋がった。

同時に、学生が授業外で取り組むべき課題が明確になり、指使いや音名をレッスン時間に影響を与えずに教示することができた。教材や指導内容をデータ化することにより、共有と管理がしやすくなった。このことにより、レッスンの時間でしかできないこと、レッスン室以外でできることにはっきり分かれた。前者はピアノを弾く時間や、苦手としている箇所の具体的な練習方法を示すこと、音楽を表現することが挙げられる。それ以外を独習として取り混ぜることでより多くのことを学生に伝えることができる。

今回の実践について筆者が担当している学生に対して行なった質問紙調査の結果から考察する。

前期授業最終回となる15回目の授業終了後に質問紙調査を行なった。

主な質問項目は以下の通りである。

表3 主な質問項目

質問2	送られてくる内容は分かりやすかったですか。(5 択) 1. 分かりやすかった 2. まあまあ分かりやすかった 3. どちらともいえない 4. 少し分かりにくかった 5. 分かりにくかった
質問4	レッスン課題がスマートフォンに送られてくることで、課題を忘れずに取り組むことができましたか。(5 択) 1. 取り組めた 2. まあまあ取り組めた 3. どちらともいえない 4. あまり取り組めなかった 5. 取り組めなかった
質問5	レッスン課題がスマートフォンに送られてくることで、ピアノに取り組む姿勢は変わりましたか？(5 択) 1. 変わった 2. まあまあ変わった 3. どちらともいえない 4. あまり変わらなかった 5. 変わらなかった

ピアノレッスンを担当した全52名（1年次生27名、2年次生25名）に質問紙調査への協力をお願いし、全49名（1年次生25名2年次生24名）からの回答が得られた。

1年次生・2年次生それぞれの集計結果を以下に記す。パーセントは小数点第一位までとし第二位以下を四捨五入して表記した。()内の数字は回答した学生数を表している。

図6 質問2 送られてくる内容は分かりやすかったですか。

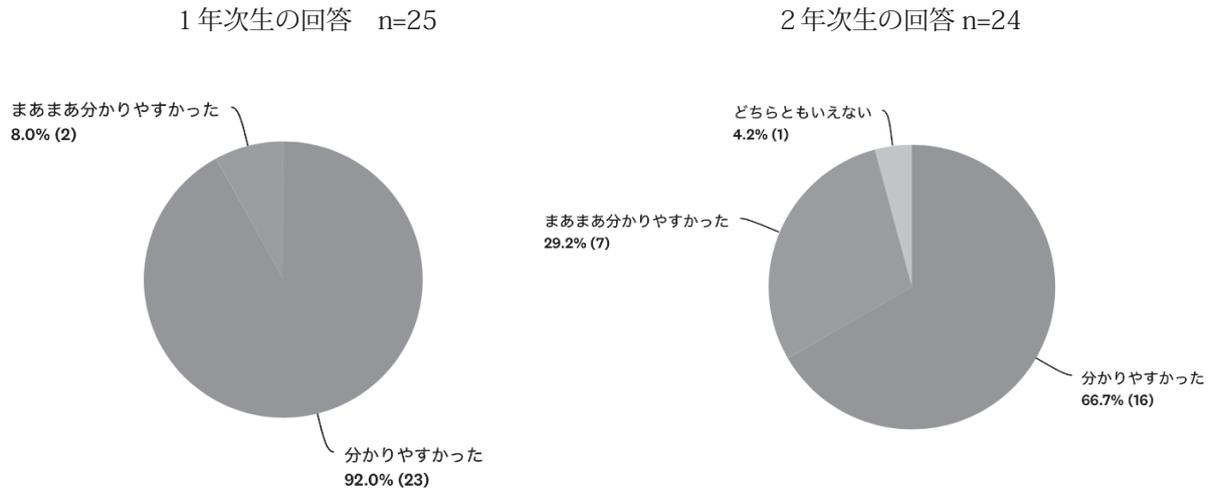


図8 質問4 レッスン課題がスマートフォンに送られてくることで、課題を忘れずに取り組むことができましたか。

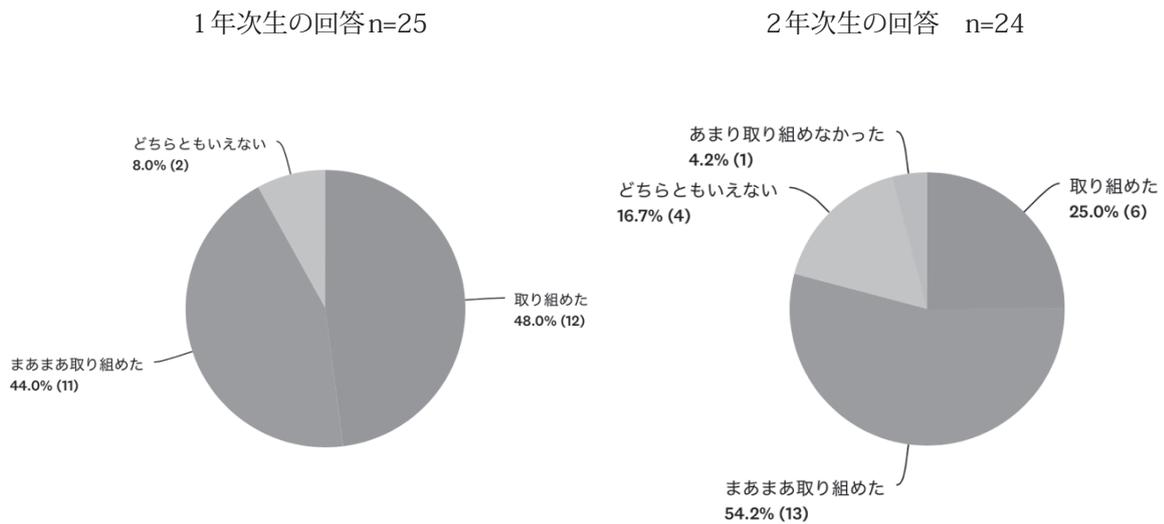
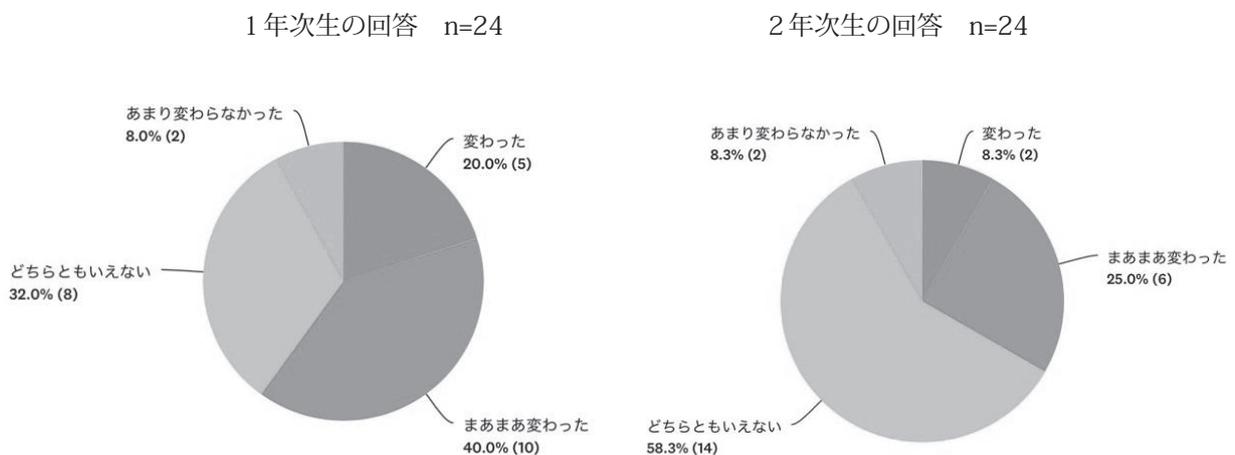


図9 質問5 レッスン課題がスマートフォンに送られてくることで、ピアノに取り組む姿勢は変わりましたか？



今回の実践で取り組んだ、学生の独習の支援について質問紙調査の結果から、考察する。

質問2で学生に送るレッスン内容の理解度がわかった。その結果1年次生・2年次生共に、ほとんどの学生が「分かりやすかった」、「まあまあ分かりやすかった」という回答だった。学生が授業外で練習する際、今週やるべき課題、また何に気をつけて取り組むべきなのかが明確になった。そのため、多くの学生から提示された課題の内容に対して理解が得られた。そして、質問4の結果につながるのだと筆者は考える。

質問4で課題への取り組みについて調査した。結果は「取り組めた」、「まあまあ取り組めた」と回答した1年次生はそれぞれ48.0% (12名), 44.0% (11名) となり、合計すると92.0% (23名)。2年次生はそれぞれ25.0% (6名), 54.2% (13名) で合計79.2% (19名) となった。いずれも、多くの学生が取り組む姿勢が変わったと回答した。学生にとって、スマートフォンは毎日持ち歩いているものである。よって、いつでもどこでも課題が確認できる環境は学生の意欲に繋がり、課題を忘れてしまうということとはなくなる。これにより、学生は授業外でレッスンの内容を忘れてしまい、取り組めなかったということが減ったと言える。実際にレッスンを行なっていてICT活用以前と比較し、課題を忘れてレッスンにくる学生はいなくなった。「やる気が出なかった」、「時間がなかった」という理由で練習に取り組まずにレッスンにくる学生はまだいるのだが、これは次なる課題である。

質問5ではICT活用により学生のピアノに取り組む姿勢まで変わるのかを調査した。

「変わった」と回答した学生は1年次生で20.0% (5名), 2年次生で8.3% (2名) であった。

今回の実践では学生の意欲まで変えることはできないということがわかった。これは、今後の課題としてレッスンの時間内に、学生がICTを活用することで改善していけるのか、さらにICT活用に関する研究を追求する。

V. 結論

本稿ではS短期大学におけるピアノ個人レッスンの課題点として「レッスンの効率化」と「独習の支援」という二つを挙げ、課題解決に向けたICTの実践について述べた。

その結果、ICT活用以前はレッスンの効率を目指す練習の支援が乏しくなり、練習の支援を丁寧に行くとレッスン時間がかかってしまうという、トレードオフの関係にある両課題を、今回の実践で同時に解決することができた。

レッスンの効率化という課題に対して、学生の現状を把握した上で、レッスンを行うことの重要性を示し、これまで紙のレッスンカードに記入を行っていたものをICT導入によりデジタル化した。これにより、紙のレッスンカードよりも管理がしやすく、学生のレッスン内容の一覧性が向上した。

また、レッスンの効率化には学生が授業外に練習に取り組むことができるのが重要であると述べた。レッスンの内容を伝え、今週取り組むべき課題を明確に示すことに取り組んだ。ICT活用以前から取り組んできたことではあったが、教員の記録用のレッスンカードと学生用の出席カードに同じような内容を二回書く必要があった。これまでは二回書くことでレッスン時間を割いてしまっていたが、ICT活用により、レッスン内で記入するものが一つに減った。これでレッスンの効率化と独習の支援を同時に解決することができた。

さらに、レッスンで次週に向けて気をつけてほしい指使いのことなど、多くの学生に同じような内容を伝えていた事項をデータで共有することにより、二つの課題に対するICT活用の有用性を示すことができた。

今回の実践により、これまでレッスンの時間内で行なっていたことが、レッスンの時にしかできないものと、レッスン外でもできることに分かれた。例えば、学生に指使いを伝える、レッスン内容を書いて渡すということはレッスン外の時間でも可能になった。一方で、レッスンでしかできないことをより一層充実させることが大切である。

しかし、今回の実践では、学生の意識までは変化が見られなかった。ピアノに取り組む姿勢はまだ目立った変化が発見されなかった。そのため、今後はICT活用による学生のピアノに対する意欲向上に向けた実践を行なっていく。

謝辞

今回の取り組みとアンケート調査に協力いただいた学生に深く感謝いたします。

参考文献・引用文献

- ・堀田龍也.学校教育における情報化の動向と課題.音楽教育実践ジャーナル.2014,11,no.2, pp.8
- ・松原正樹・遠山紀子・斎藤博昭.ピアノ初心者のための独習支援システムの提案.情報処理学会研究報告音楽情報科学.2006,19,pp.1
- ・1) と同文献・同ページ
- ・小池幸司・神谷加代.iPad教育活用7つの秘訣～先駆者に聞く教育現場での実践とアプリ選びのコツ～.株式会社ウイネット編,ウイネット出版,2013
- ・小池幸司・神谷加代.iPad教育活用7つの秘訣2～新しいまなびの実践者にきくICT活用実践と2020年突破の鍵～.株式会社ウイネット編著,ウイネット出版,2018
- ・筑波大学附属小学校 情報・ICT活動研究部.筑波発 強化のプロもおすすめするICT活用術-「ちょっとしたこと」から「こんなときこそ」まで事例36場面-,東洋館出版社,2018
- ・新潟大学教育学部附属新潟小学校.ICT×思考ツールつくる「主体的・対話的で深い学び」を促す授業,小学館,2017
- ・伊藤義博・中村正之・森下修次.音楽授業におけるICTの活用－MIDIシーケンスソフト Domioを用いた創作授業の検討から－.新潟大学教育学部研究紀要.2017,10
- ・長嶺章子.ピアノ弾き歌い学習支援におけるICT利活用の効果と課題.植草学園短期大学研究紀要.2017,19
- ・小倉隆一郎。田中功一.ピアノの初歩学習を支援するICT活用の試み～PCと携帯電話でバイエル演奏データを配信する～.2011.
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-22500952/> (2018-12-12)。